

説 教 『キリスト、永遠の弱さ』 山本 護 牧師  
聖 書 申命記 6：4～7／コリントの信徒への手紙二 13：4

自分では将棋や碁をしないが、棋士たちのドキュメントはいずれも興味深く、つい読みふけてしまう。将棋の芹沢博文や碁の藤沢秀行などは、破天荒で傍迷惑なおじさんだが、その対局には人間の崖っぷちすれすれを進む鬼気迫る魅力があるらしい。しかし今や将棋も碁もコンピュータに勝てない。自ら学習する人工知能は、奇手も好手も偏りなく習得し続け、凄腕棋士の癖や偏見や味わいにピシッと駒を置いて、相手を打ち砕く。こういう対局では、苦渋する人間の「弱さ」は文学でなくなる。

「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられたが、神の力によって生きておられる(Ⅱコリント 13:4)」。御子イエスは人の世に降り、私たちの弱さを負って十字架につけられた。この神の犠牲はキリスト信仰の中心。「わたしたちもキリストに結ばれた者として弱い者(13:4)」。強い所だっただろうが、弱い所で私たちは「キリストに結ばれている」。言葉では分かっても、ここが腹に落ちないのか。敬虔な生き方や信仰心、つまり強い所で「キリストに結ばれている」と考えてしまう人は少なくない。

「しかし、あなたがたに対しては、神の力によってキリストと共に生きている(13:4)」。「あなたがたに対しては」とは、「信仰者の君たちなら分かるはずだ」というニュアンスか。弱さを隠さず、キリストに結ばれ、自分の十字架が負われている真実を自覚するなら、君たちは(私たちと同様)「キリストと共に生きている」はずだ、と。「神の力」が働くのはキリスト、そしてキリストを介した私たち。

「神の力」の強さは「永遠」に関することくらい理解力の外にある。しかしキリストは私たちの罪を負って十字架で死んだ、ほど弱い。これとてとてつもない出来事だが、かろうじて想像力に納まる。なぜなら、一人ひとりの「弱さ」が結び目になっているから。神の強さは無限で把握できず、私の感覚を超えている。だが弱さなら分かる。各々に歴史があつて多様、体温があり、偏りがあるからだ。

私たちは「神の力によってキリストと共に生きている(13:4)」だから私たちは、自らの内にキリストを見いだす。キリストを見いだしてどうするのか。そのキリストの内に私たち自身を見いだすのだ。「自分の事なら分かっている」と思うかもしれない。はたしてそうだろうか。そもそも自分の姿など折々に違ふし、しかも願望や恐れによって無意識の奥底まで脚色されている。だからといって、自分の隅々を神経質に確認する必要などない。私の内に見いだすキリストと、キリストの内に見いだす私だけでももう充分。なぜならば、それが私の中心であり、神の力が働いている所だから(13:4)。

「キリストと共に生きている(13:4)」。生きているただ中で、キリストと共に自分を見いだす。どうやって見いだすのか。たとえば日々の状況において「今イエスは私に何を望んでおられるか」と問い、決意し、行動する。私たちがそれを問いながら生きる時、未知が現実にかかれる。伝統的にそれを「聖霊の働き」と表現した。聖霊は日々現れるキリストの働き、見えない風(霊)の痕跡がキリスト。

「キリストは～神の力によって生きておられる(13:4)」つまり私たちは、キリストと共に今も後も、永遠を生きる(13:4)。永遠は理解力の外にあるが、私たちは消滅せず、「命」に与ることだけは分かる。



《おまけのひとこと》

黒地と白地のだまし絵 黒で見れば鳥 白で見れば魚というあれだ 白のキリストを黒の私で見る 黒の私は白のキリストで形づくられる キリストは霊として吹き抜け ここを通過して私を形づくる